

府中かんきょう 市民の会

NPO法人 府中かんきょう市民の会々報

2015年 夏号 7月8日発行 通巻57号

発行人：竹内 章（府中市分梅町）

TEL 042-364-3428

「環境保全功劳」の功績で表彰される

府中市では、昭和33年に「府中市表彰条例」を制定し、市政施行20周年より、毎年、市民の生活や文化の向上など、市政の伸展に特に功劳のあった市民や団体を表彰しております。

この度、図らずも「NPO法人府中かんきょう市民の会(以後当会という)」が、平成27年度の「環境保全功劳」の分野で、その功績が顕著であったとの理由で、表彰対象に選ばれました。

平成27年5月29日(金)に、ルミエール府中のコンベンションホール(飛鳥)で開催された市民表彰式で、表彰状が授与されました(写真右)。

当日は、各分野で功績があった市民や団体43組が式典に招待され、自治功劳や社会福祉功劳など分野別の表彰者に、高野市長から一人ひとりに表彰状と記念品が授与されました。

当会から竹内 章理事長と五十嵐四郎副理事長および小西信生事務局長代理の3名が会を代表して参加いたしましたが、団体として表彰されたのは当会のみでした。



高野市長から表彰状を授与される竹内理事長

表彰者の選定については、「府中市表彰条例施行規則」で詳細に規定されており、市の各部局より、表彰に値すると認められる者がある時は、表彰対象者の業績を精査し、事績調書を添えて市長に内申することになっています。

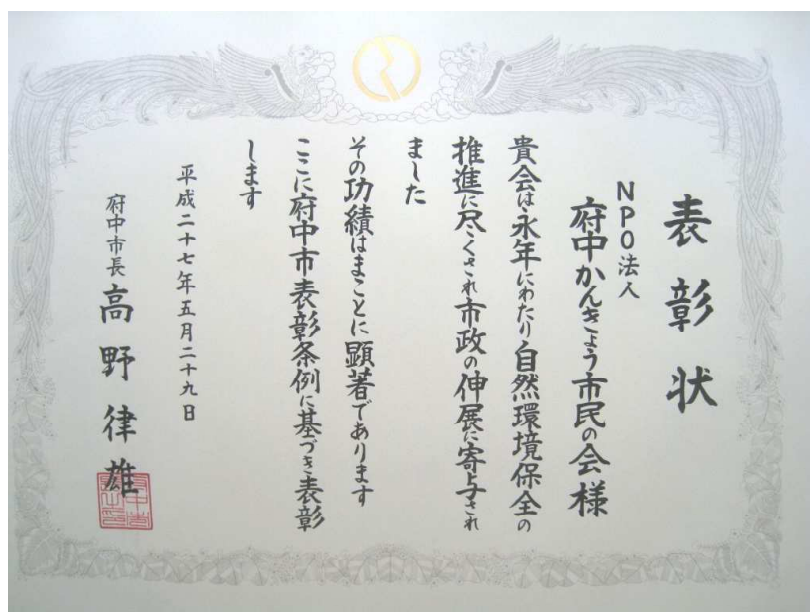
さらに、市長の諮問機関である「表彰審査会」を設置し、内申のあった表彰対象者の業績および日常の行いなどを審査して表彰者が決定されます。

当会が府中市から表彰されるのは、平成26年度の市制施行60周年の記念顕彰式に続いて2度目であり、当会が永年にわたり市政の伸展に多大な功績があったことが市から認められたものであり、大変名誉なことで、会員ともども喜びたいと思います。

なお、当会の環境保全活動の具体例については、市制施行60周年記念顕彰式の模様を記載した、当会の会報(2015年1月14日発行の冬号/通巻55号)に詳細に掲載していますので、今回は省略させていただきます。

これからも、これを糧にして、会員ともども府中市の環境保全活動に微力ながら貢献して参りたいと思っております。

(理事長 竹内 章)



表彰状

「レンゲまつり」が今回で終了

会報で、15年を振り返る

「レンゲまつり」はレンゲ田にふるさとの原風景を再現し、むかし遊びをしながら、府中の緑や農地を保全する重要性を考える機会になればと始めました。ここまで続けることができたのも、田んぼの持ち主の戸塚さんや市民の会の会員、地元の方々のご協力の賜物です。花飾り遊び(写真下)や、草笛・ぞうり作りなどを楽しむ子どもたちの笑顔にも随分勇気づけられました。

楽しそうな花飾りあそび



2007年の会報春号の記事に次のような内容が掲載されています。ある中学生は、「…自然のあるまちは住んでいて気持ちがいいし、人々の交流も盛んになる。私自身そういう体験をしてきたので、例を挙げるとレンゲまつりなんかがそう。このお祭りは田んぼがあつて初めてできるお祭りだし、実際に友達もできた。このように自然とも人ともふれあえることができるイベントを増やせば、人々の自然保護に対する意識も高まり、住みやすいまちをつくれるというものだ」(平成18年10月開催『中学生による総合計画意見発表会』での意見)。

2014年夏号では、初参加の都立府中東高校生物部が、バルーンアートや蜂蜜採取実演をして次のような報告を書きました。「今回のお祭りで2つの事を学んだ。1つは自然環境を維持する大切さ。純血の蜂は環境が悪化すると逃げる習性があり、地球上の植物の4割は蜂がいないと受粉できない。2つ目は人とふれあうことの大切さで、子どもたちがバルーンアートや蜂蜜絞りを体験している時に見せる真剣で一生懸命な姿を見て、自分たちも真剣に教えた。一生懸命やる事の大切さと楽しさに気付いた。人とふれあうことで、相手から何かを学ぶことができると分かった」(概略)との内容でした。かんきょう市民の会がレンゲまつりを通して伝えたいことが、伝わっている手ごたえを感じます。

レンゲを咲かせる工夫

レンゲの開花状況は、その年の条件により様々に違います。種を撒いた時の田んぼの水分の量や、その後の降雨量や気温によって、芽が出る時期も異なります。その為、種を稲刈り前と田んぼを耕運した後に分けて撒いたり、

工夫をかさねました。春先に良く育っていると安心していると、いつの間にか葉や花芽を食べるアルファルファータコゾウムシが発生していて、お祭りまで花をもたせる為に殺虫剤(1か月だけ効きめがある)を散布する事もありました。アルファルファータコゾウムシ対策として、お祭りに田んぼの周りに段ボールを敷いて捕獲する、バーナーで畑を焼くなど、いろいろな方法で防除を試みましたが、これといった決め手はありませんでした。

周辺のレンゲを植えている農家に聞き取り調査もしましたが、2002年11か所あったレンゲ田は、2015年には市内に2か所にまで減少していました。原因としては、レンゲを田にすき込むと、窒素過多になり「コシヒカリ」が伸びすぎて倒れてしまう。レンゲを好むアルファルファータコゾウムシの発生もレンゲ田減少の要因と考えられます。

幸い15回目のレンゲまつりは害虫に食害されてはいましたが、北側の田はかなりのレンゲが開花したので、安心して祭りを楽しむことができました。今回は「あおぞら劇場」や「けん玉」「南京玉すだれ」など新しい企画もあり、およそ600名の来場者がありました。南白糸台小や第八小の学童保育の子どもたちも遊びに来てくれて、帰り際に「ありがとうございました」というお礼の声を聞くと、本当にやりがいを感じます。

しかし15年目を迎えて、スタッフの高齢化やレンゲの連作障害などの課題が浮き彫りになり、ここで一区切りつけることになりました。今まで「レンゲまつり」を支えて下さった戸塚さんをはじめ地元の方々やお手伝いをしてくださった皆様に厚くお礼を申し上げます。

会場のレンゲ田



東日本大震災義援金

今年は東日本大震災から4年目になります。多くの被災者の方々が先の見えない不安な日々を過ごし、福島第1原発も汚染地下水漏れなど、様々な問題を抱えたままです。そのようななかで、自分たちにもできる事をと、かんきょう市民の会として「レンゲまつり」で義援金を募りました。今年は会場で集まった義援金に会からの拠出金を合わせて4万円を、6月に会員が双葉町役場に届けました。ご協力下さった皆様、ありがとうございました。(梅沢みどり)

「レンゲまつり」に参加して

スタッフとして初参加の三神恵子さん(府中子ども劇場)に寄稿いただきました。(編集部)

晴天に恵まれた「レンゲまつり」当日は、「レンゲまつり」と書かれた沢山ののぼり旗が飾られ、レンゲ畑の草のいいかおりのするなかで行われました。

私たち、府中子ども劇場は初参加です。あおぞら劇場と題した野外ステージでの「南京玉すだれ実演」2回とブースでは展示コーナーと「南京玉すだれ教室」を行いました。

あおぞら劇場では子ども劇場の「南京玉すだれ実演」のほかに「けん玉の模範演技」の披露や「草笛コンサート」が行なわれ、お客さんから大きな拍手をいただきました。いま大人気になっている「けん玉」は、小学校の子がエレベーターや空中ブランコなどの難度の高い技を披露してくれた時はスゴイと感動しました。

まつり開始から親子連れや学童クラブの子どもたちが大勢訪れ、遊ぶ姿が見られました。毎年行われている「花飾り遊び」「シャボン玉遊び(写真下)」「草笛づくり」「こまづくり」「布ぞうりづくり」「シュロの葉でバッタづくり」に加えて「南京玉すだれ教室」「けん玉教室」が加わり、沢山の遊びがありました。

そのほかにもイチゴの苗・地元産の野菜や蜂蜜販売などと大人にも嬉しいお店が並びました。

シャボン玉遊びに興じる子どもたち



「子ども劇場」ブースでは「南京玉すだれ教室」のほかに、たまたま持ってきた、バルーンで動物を作り子どもたちにあげましたが、思わぬほどの大盛況となり、列を作ってくれたのに、バルーンが無くなってしまいもらえなかった子どもたちには、とてもかわいそうなことをしたと思います。きちんと準備していないことは、安易にはいけないと反省しました。

一方「南京玉すだれ」の人気も嬉しいほどにあり、子どもたちは初めて触れることで喜び、大人は見たことはあるけど触ったことはないに興味津々で技の習得に熱心な方もいました。

「南京玉すだれ」は要領がわかると、創意工夫で沢山の技ができます。3歳くらいの小さい子がお父さんと草むらに「南京玉すだれ」を長ーくのぼしてクネクネさせながら、「ヘビー、ヘビー」と何十分も遊んでいました。子どもの発想力といつまでも一緒に遊ぶお父さんの姿がとても素敵だなと思いました。

南京玉すだれの実演



まつりの終わりのころになってのことですが、府中市観光情報センターの方がみえて、「レンゲまつり」の様子を広報したいとのことで写真を撮っていらっしゃいました。

「南京玉すだれ」にもとても興味を持っていただき、みなで「打ち上げ花火」の形をつくり、満面の笑顔で写真に収まりました。

レンゲ畑は府中のなかでも、もう2〜3か所しかないと、かんきょう市民の会の方に聞きました。子どもがレンゲを摘んで花飾りをつくる姿は、すでに昔の遊びになってしまいましたが、府中のなかでこの季節にレンゲ畑が見られることだけでも嬉しいことですし、そのなかで遊びができる「レンゲまつり」を作ってきたかんきょう市民の会の皆さんの努力に感謝したいと思います。

最後に府中子ども劇場の会員のお誘いをいたします。親子や地域の仲間と一緒に生のお芝居や音楽などを鑑賞することと、キャンプなどの遊び体験をすることで豊かな心と感性を育む活動をしている会員制の会です。4歳から会員になれます。ぜひ会員になって、一緒に楽しみましょう。

問い合わせ先:府中子ども劇場 TEL/FAX 042-336-4440
紅葉丘3-22-2-105

(府中子ども劇場 三神恵子)

田んぼの
学校2015

開校式・田植えの巻

10周年を迎えた田んぼの学校

今年は「田んぼの学校」を始めて10年目であるが、顧みると当時、市環境基本計画は市民の手作りで、画期的だと

マスコミにも注目された。自然環境が減少、気軽に身近な自然に親しむことが難しいと共通認識され、“崖線、用水、多摩川など「水と緑のネットワーク」を守り育てる”ことが重点施策となった。これに呼応して、当会は3年間にわたり、大学と共催で「水に親しむ環境づくりの公開シンポ」を呼びかけた。

登校日は5回であるが、前準備やスタッフ会議で、本町農場に本林先生を訪ねることが多い。陽気に誘われるように近くの保育園児が、農場のあぜ道を散歩するのに出会うことがある。園児にとって田んぼは広く、のびのびした遊び場だ(ただし、農場への入場は農作業が始まる前は許可がいる)。実に微笑ましい光景である。街中にぽっかり広がる3haの緑地は「いいい・やすらぎ空間」を実感させてくれる。

②



3年目の開催時、武蔵府中ロータリークラブが50周年記念事業として「米づくり体験」案が浮上。丁度、シンポパネリストにお招きし、つながりのできた府中用水組合役員の仲介で、大学、クラブ、当会の三者協議が持たれた。折しも、当会も本町農場で、「田んぼの学校」(環境学習)を計画し、大学に打診中だった関係で、双方の市民力が発揮された形で、大学の協力が得られ、ロータリークラブとの共催が実現した。翌年(2005)からは当会が引継いでいるが、共催も数えると11年になる。

この間、東京農工大学並び諸先生には環境教育、水田耕作、農機具貸与など、おおくの指導・助言をいただき、感謝に堪えません。よく、10年を一区切りと言われる。この機会に、今まで培ってきた他者との連携・協力のあり方やカリキュラム編成などを振り返り、蓄積したノウハウを活かして、新たな活動につなげる視点を大事にしたいものだ。

初回は雨予報が一転、快晴に☀

5月31日(日)は最初の登校日で、雨予報が一転、快晴の真夏日となり、猛暑を心配しながらの開校式・田植えとなった。式は、竹内理事長、東京農工大学農学部を代表して大里先生、続いて主催者でもある前島環境政策課長の挨拶のあと、スタッフ紹介があった。大学からはサークル「耕地の会」を中心に9名、府中東高からは生物部顧問の山崎先生をはじめ、9名の生徒さんが参加された。若さあふれる援軍は頼もしい。

③

稲作の一年と苗の植え方の説明後、人気の“ピョピョさん”のかけ声で始まる準備体操で、気分がほぐれたところで、東西2班に分かれて田んぼに入った。生徒が植え、保護者は後ろから苗の手渡し役を担ってもらう。ヌルヌル感やようやく植え方に慣れた頃、一斉休憩で水補給をして、熱中症対策に努めた。



昨年までは一本植えでしたが、今回から3本植えの他、苗間隔を狭くしたことや作付面積が増えたことが重なり、苗が不足し、途中、2本、1本植えに切り替えたものの、1/3の空田を残すハプニングとなった(後日、苗の補充を受けてスタッフが補植)。手足洗い後、バケツ稲の植え方と生長観察の解説、アンケート記入して、最後に苗、用土と肥料袋を手渡しして解散。

今回の参加者は生徒41名、保護者37名、スタッフ等で総勢113名を数えた。中には生徒に付き添う父母のほか、祖父まで参加される家族もあった。また、家族に連れられた未就学児童もちらほら集まり、田植えには加われない代わりにカエルとりに熱中する光景も見られた。

④

因みに今年は、募集定員40名に対して83名の応募をいただいた。抽選とはいえ、半数の方が落選された。研究農場のため、受入人数の制限を承知しながらも、参加できなかった方々には心苦しい思いが残る。イベントや行事等を発信して、つながることができれば、活動を広げることができるのではないかと。

(進藤 礼治郎)



写真①開校式の会場で展示された「田んぼの学校」の看板

②ピョピョさん体操始め！

③田植え開始！

④田んぼでのんびり、トウキョウダルマガエル(東京レッドリスト絶滅危惧ⅠB類)

第5回 わき水まつり(パート2)のお知らせ

用水の生き物探検隊、パネル展示など



昨年のわき水まつりのパネル展示
雨模様のため背景が暗い／あずまや前にて

日時 7月17日(金) 18日(土) 10:00～16:00
会場 西府崖線の市川緑道 あずまや付近他
内容 用水の生き物探検隊、シュロの葉からバッタ作り、
湧水保全・保存樹林地の現状、崖線の生き物等
のパネル展示など
協力 東京農工大院生、地元有志
問合 浅田宛(090・8806・8165)
公園緑地課 公園施設係(335・4312)
※雨天のときは変更があるかもしれません。

○わき水まつりパート1(6/28講演会)に続く催し物です。

第8回 西府崖線(ハケ) 春の清掃活動を実施

日時 5月17日(日) 10:00～11:45
天候 晴
参加者 15人(市民の会以外の参加者は8人)
ゴミ 11袋分収集

16日が雨のため順延となった。そのため、事前に把握していた参加者がほぼ半減。少し落胆気味に市川緑道のあずまやに向かい、9:30頃到着した。しかし、一般参加の女性が時間を9時集合と勘違いし、すでに汗をかくて作業を開始していた。そのうちシルバー人材センターの方々、市民の会会員が集まり総勢15人となった。

作業はハケ上の班とハケ下2班の計3班にわかれた。作業終了間際に通りかかった人からお菓子の差入れもあった。作業終了後の意見交換では、全体的にゴミが少なくなったとの意見がでたが、同感である。ゴミを放置しているとますますゴミ捨て場と化し、環境を悪化させる。清掃作業を始めて4年目となるが少々うれしい気分でもある。

ゴミが減り、そのうえ見知らぬ人からお菓子の差入れまであり、天候にも恵まれて清々しい一日となった。

(葛西利武)

春の清掃活動に参加して

府中市シルバー人材センター・西府地区
熊澤孝義さんの寄稿

◎本原稿は『ハケ・用水・わき水通信(No.17/平成27.6.1発行)』からの転載です。

私たち府中市シルバー人材センター西府地区の会員はNPO法人府中かんきょう市民の会のご指導のもと、昨年春の清掃活動を一回目として、今回で3回目の参加となりました。初参加のときからすれば、ハケの何たるかが少し理解でき、ハケは町なかに存在する数少ない自然といっても差し支えないことがわかりました。

あずまや前での収集したゴミの分別作業



それは、古代から脈々と引き継がれ、今や得難い府中の自然遺産「府中崖線(ハケ)」を如何に自然のまま美しい状態で保っていくことができるか。そういったことが実際の作業を行いながら、またハケをよく知るかんきょう市民の会のメンバーの熱のこもった説明を受けながら、少しは考えられるようになった気がします。

空き缶やビニール袋に入ったゴミをハケに捨てず、自分ひとりが捨てても平気というその気持ちを捨ててほしい。川底に沈んだビニール袋などに邪魔されずに、用水をよどみなく流したい。

そして、わき水は涸れることなく、いつまでも湧き出てほしい。それらを守るためには、地道に定期的に私たちの小さな力を積み重ねて活動する必要があると思います。

あずまの後ろに
置かれたゴミ袋→



我が家のエコ自慢2 題

1. ミニソーラーパネルで庭園灯を点灯

ミニソーラーパネルと庭園灯



平成24年に某市民団体の企画で、「ミニ太陽光発電システム組み立て」の講習会があり、参加しました。

以前からソーラーパネルには関心がありましたが、屋根全体にソーラーパネルを乗せて発電させる、完全な太陽光発電システムを設置するほど予算も無く、屋根の強度不足も懸念されるため、設置を見送っておりました。

そんな時に、この講習会の企画を知り参加してみました。組立希望者は5～6グループ程で、その他見学者が十数人ほどいましたが、企画した団体が女性中心の団体であったためか、女性に囲まれながらの講習会でした。

某企業が用意した各パーツ(部品)を前に、組み立て方の指導をしてくれましたが、電圧や電流、電力などの専門用語を久しぶりに聞き、これでも技術系出身なので、昔を思い出しました。

組み立てる主なパーツは、①ソーラーパネル(縦76cm、横54cm)、②チャージコントローラー(過充電や逆流を防止す

る機器)、③インバーター(直流を交流に変換する機器)、④自動車用のバッテリー(発電した電力を充電及び供給する機器)、⑤シガーソケット(電気を取り出す機器)などと、それぞれの機器をつなぎ合わせるコネクターや丸型端子、電線、ケーブルなどが用意されていました(写真左下)。

装置全体の発電容量は、出力約50W($17.6V \times 2.85A$)で、電力量は150～200Whです。バッテリー容量は($12V \times 27A$)324Whで、満タンで、10～14Vです。

我が家では、庭の庭園灯(LED電球20W)1灯を点けていますが、暗くなると自動で点灯し、夜の12時頃になると消灯する節電タイプです。

パネルの設置場所は、日あたりのよい場所を選ぶ必要があります。丁度ガレージの屋根が一部破損している箇所があり、そこは適当な傾きもあり、ベストポジションです。天気の良い日が続く場合はよいのですが、曇りや雨の日が続くとアラームがなり、バッテリーが容量不足になっていることを知らせてくれます。2～3年使用するとバッテリーの充電容量が衰えてくるためか、最近庭園灯の電気を切って充電する回数が増加していますが、我が家の細かなエコ自慢の「ミニ太陽光発電システム」です。

2. ゴーヤのグリーンカーテンを設置

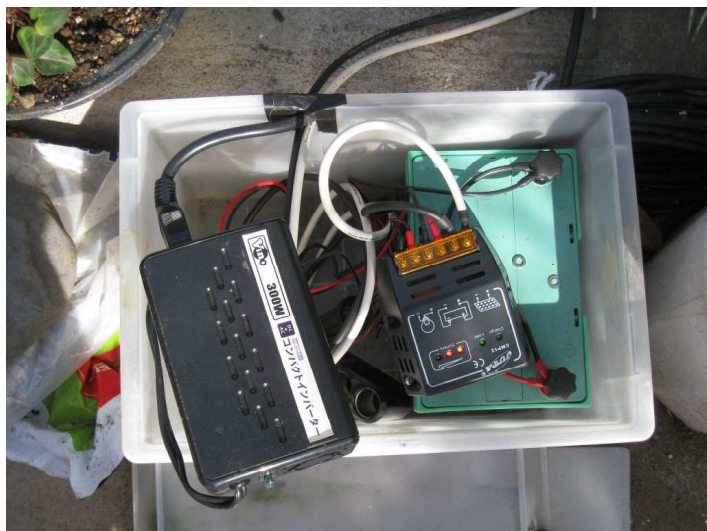


我が家では、10年ほど前から毎年ゴーヤのグリーンカーテンを作っています。私の部屋は西側にあり、毎年夏には西日で室温があがり、ヨシズで日除けをしています。それでも暑いのでゴーヤでグリーンカーテンをしています。

毎年5月ごろ、近くのホームセンターでゴーヤの苗を2本買い、大きめのプランターに植えています。幅約1.7m、高さ約4mのネットを、西日が当たる窓際に設置して、2階のベランダまで這わせています(写真上)。

ゴーヤカーテン越しの窓際は、日中でも室温が1～2℃低くなり、見た目も涼しく、ゴーヤの実もたくさん収穫できます。我が家では白ゴーヤの苗を植えており、苦味も少なく柔らかで、ゴーヤジュースを作り毎日飲んでます。

(竹内 章)



「市民アーカイブ多摩」を訪ねて

だいぶ昔の話になるが1972年、当時の美濃部都知事が市民活動を支援し主権者意識を高める目的で、都立立川社会教育会館(当時)に「市民活動サービスコーナー」を設けた。資料収集・情報提供・市民交流や相談窓口として広く市民に呼びかけた。

ここに蓄積されたミニコミ誌や団体発行の機関紙など30年に及ぶ市民資料が、その後の東京都の事業縮小によりあわや廃棄の憂き目に、それを見るに見かねた心ある市民が立ち上がった。

これが現在ある「市民アーカイブ多摩」の活動の原点である。

2002年にサービスコーナーは廃止され、残された資料は段ボール500箱に及び流浪の民のごとく落ち着き先を探して「市民活動資料・情報センターをつくる会」の関係者は大変な努力を重ねてきた。

この東京都から受け継いだものは資料群Aと呼ばれ、ようやく2012年に「大原社会問題研究所 環境アーカイブズ」(法政大学多摩キャンパス内)に収められ、ほぼ10年をかけて喪失を免れる事ができた。

ここまでの経緯の一々を知ると、よくぞ中断せずにとわくずにはいられない。

資料群Bと呼ばれるものがここ立川にあるコレクションで、コーナー廃止以降に収集され現在も継続している資料である。2014年4月玉川上水近くの有志提供による民家を改装し、晴れて開館の日を迎える事ができたのである。

- 分類番号 分野
- 00 市民活動総記
 - 10 政治・経済
 - 20 平和・戦争
 - 30 人権・差別
 - 40 環境
 - 50 公害
 - 60 社会福祉
 - 70 教育・文化
 - 80 生活・消費者
 - 90 その他



ちなみに「府中かんきょう市民の会」会報は環境の40環境問題一般に収められていた。

細目は40環境問題一般／41開発／42都市計画／43都市問題／44交通／45環境衛生／46住宅／47土地／48防災／49自然となっている。



見学を終え大きな木のテーブルを囲んでスタッフからお話を伺った(写真上)。

開館から1年が経ち、理念、人手、資金や収集の選択基準、増え続ける資料の保存場所など様々な問題があり、またこのアーカイブをいかに活用してもらえるかなど運営の課題があるようだ。

しかし、市民活動資料の重要性への思いを結集させ、困難を乗り越えて「市民アーカイブ多摩」がここに開かれている事は、それぞれの地域で活動されている団体や一市民に＜事実の集積層＞として活用されるに違いない。

連絡先 ネットワーク・市民アーカイブ
〒190-0002 立川市幸町5-96-7

Tel/fax 042-536-5535(平日昼間は042-540-1663)

開館 水曜日 第2・4土曜日 13:00～16:00

ホームページ <http://homepage3.nifty.com/simin-siryo/>

(竹村 勝代)



スズランの咲く頃、アーカイブをお訪ねした(写真上)。

新緑の雑木林に包まれた建物に、濃い緑色に白ぬき文字で「市民アーカイブ多摩」の案内板が見えた。

スタッフの江頭さんが迎えて下さり、ギッシリ詰まった資料棚を閲覧させていただいた。棚はここ独自の方式で10区分に分類され、さらに10細目に分かれている(写真右上)。

「陸前高田市民を勝手に応援する会」に参加して

陸前高田市の戸羽市長は、現状の苦境を訴え「被災地のことをときどき思い出してほしい、忘れないで応援ほしい」と訴えていました。



JR三陸鉄道「三陸駅」

4月28日～30日まで三陸被災地に行ってきました。夜行バスの旅は高齢の身には、きついと思いましたが参加しました。

29日早朝釜石に着き、JR三陸鉄道「南リアス線復活」の横断幕のある三陸駅から乗車、車窓からは盛土工事で土ぼこりをあげる様が続いており、これからどうなるのかと思いました。途中から学生さんが乗って来てなにかホッとしました。盛(さかり)駅で下車し、その後大船渡にて地元の方の案内で屋台村など見学しました。開店前でしたが、この頃は訪れる人も少なくなったとのことで活気が見られませんでした。そして昨年行った陸前高田市を再び訪れましたが、一年前と大きく変わっていました。

山を削っての盛土で150メートルの山が現在80メートルになり、さらに60メートルまで下げてそこに家を建てる計画だそうです。当初より建築資材が倍に高騰し、整地された所を抽選で当たっても家が立てられず、借金をしても返す当てもなく仮設で我慢すると云う人が増えているとのこ



住宅建設のため、山を削っての盛土工事

とです。この日は気仙沼に泊まりました。眼下には広々とした穏やかな美しい海が広がっていました。

4月30日は南三陸町を訪問しました。現地ボランティアガイドによって被災地を回りました。他の所と同様に盛土が見られました。しかし、人影は私たち以外にはありませんでした。

震災当時14時46分地震があった後、15時05分には潮が引いて海が陸地になりました。チリ地震では6.5メートルだったからと高台にある中学校付近の人は、安心して見物するつもりで校庭にいましたが、津波はあっという間に23mの高さにせり上がり、10人を呑み込んでしまいました。

骨格だけ残った旧防災センター



その後防災センターだった所を見学しました。骨格だけは残っていました。高さは12メートル、女性職員がマイクで高台に逃げてくださいと繰り返し、「今は何メートルです！」「今、10メートルです！」と放送し続けました。

課長の声で「やめて逃げなさい！」とマイクに入っていたが、アナウンスを続けました。実際には16メートルの高さまで水がきて、そこにいた方たちは亡くなりました。

女性職員の声は天使の声と言われているそうですが、防災センターは無残な形で残っており、そこで亡くなった家族や関係者は当時を思い出し辛いので早く取り壊してほしいと云っている方が多くいます。しかし、その災害を忘れないように遺した方がよいと云う方もいます。広島の実験ドームも20年かけて保存が決まったそうです。

旧防災センターには、今も花束が沢山飾られていました。私たちは車内で集めたカンパをお渡しし、気仙沼の魚市場で沢山買い込み帰途につきました。

本稿は、被災地を何度か訪ねている勝谷寛子さんに原稿依頼したものです。